

NBS



第15回 日本排尿機能学会

The 15th Annual Meeting of the Neurogenic Bladder Society.

プログラム・抄録集

Back to the future: What is new in continence medicine?



■会 期 | 2008年9月11日(木)・12日(金)・13日(土)

■会 場 | 大手町サンケイプラザ
東京都千代田区大手町1-7-2

■会 長 | 本間 之夫 (東京大学医学部泌尿器科)

日 排 尿 会 誌
NBS

日本排尿機能学会誌
第19巻第1号 2008

北九州病院方式オムツ外しスコアによる合理的な尿路管理；要介護高齢者321例のアウトカム

¹北九古賀病院・泌尿器科・排泄管理指導室、

²北九州古賀病院・排泄管理指導室・看護部

○岩坪 暎二¹、八木 廣朗¹、永沼 真由美²

「目的」要介護高齢者の排尿管理を合理的に行うため、膀胱機能をスコアで評価し、排泄自立能力（尿意伝達とADL能力）と組み合わせて取り組み効果を予測する北九州病院方式オムツ外しスコア化を提唱（既報）してきたが、要介護高齢者321例の結果と有用性を報告する。「対象と方法」新患入院した要介護高齢者で排泄管理を必要とする321例（男120名、女201：年齢 82.0 ± 10.3 歳）主病は脳傷病43%、ADL傷病46%、認知症52%、である。例排尿記録、或いは1時間毎のオムツチェック法（24時間連続）により、(1) 平均排尿量 (2) 平均残尿量 (3) 排尿回数で膀胱機能を正常（スコア3）、低下（2, 1）、廃絶（0）と分類し、尿意伝達（できる1点、出来ない0点）、トイレ動作（できる2点、声掛け・誘導で出来る1点、出来ない0点）と評価した。それらの合計＝オムツ外しスコア（6点～0点）予測をもとに1ヶ月間介護に取り組んだ。「結果」1、膀胱機能正常51（16%）例、低下188（58%）、廃絶82（25%）であった。2、排尿自立能力（尿意伝達＋トイレ動作）は、スコア3点23例（7%）、2点84例（26%）、1点68例（21%）、0点147例（46%）であった。3、1ヶ月後の排尿管理法は、自立29例（9%）、パッド73（23%）、夜のみオムツ55（17%）、昼夜オムツ150（47%）、間欠導尿8、留置カテ3、その他3例となった。4、クロス集計でみる膀胱機能と排尿自立能力の関係は排泄管理法の結果と有意に関連した。「考察」要介護高齢者の1時間毎オムツチェックは数量的に膀胱機能（排尿量、残尿率）を把握でき、個々の症例毎に一定で数値化・グラフ化でき、従来の「排尿パターンの把握」は無意味で、膀胱機能しか便りにできない。「結論」オムツ使用者の排尿評価と対策に1時間毎オムツチェック（1日間）による膀胱機能（排尿量、残尿量）把握は、排泄自立能力と組み合わせた「北九州病院方式オムツ外しスコア化」で合理的な排泄管理を可能にし、介護者・被介護者の負担を軽減できる。